公益社団法人宇都宮青年会議所　２０１４年度理事長所信（案）　Ver.35

村上　正高

我々は、一人ひとりが宇都宮そのものであり、ＪＣそのものである。

我々は、外から見れば一人ひとりが宇都宮の代表であり、その言動で宇都宮を判断される。これはＪＡＹＣＥＥとしても言えることで、その言動、振る舞いなどを見られＪＣを判断される。育ててくれた大切な地域で、高い理想を掲げ市民運動をしている我々自身が率先して行動できているか。その言動が乖離していないか。自らが市民としてその模範となれているか。常にどうあるべきかを問う。市民として、そしてＪＡＹＣＥＥとして。

【はじめに】

私は、２００３年に宇都宮青年会議所の一員となった。初めて出席した例会に作業服姿で行き、恥ずかしい思いをしたことを今でも鮮明に憶えている。スーツに身を包み、崇高な理念を唱和している先輩方が眩しく見え、仕事でもないのに常に全力で地域社会への奉仕活動に明け暮れる姿を意味もわからずただ追いかけた。

青年会議所は、メンバーが志を共有しベクトルを合わせ運動展開することにより「明るい豊かな社会の実現」を目指す。４０歳までという年齢制限と社会開発をしながら自己研鑽し、自己研鑽したメンバーが社会開発をするという青年会議所ならではのシステムが好循環を生み出し、運動の質を上げ、若き溢れんばかりの情熱で常に市民運動の先頭に立ってきた。入会して数ヶ月が経った頃に自分の中で確信したことがある。青年会議所運動は「仕事」である。社会から与えられ、使命感をもって社会に還元することのできる機会は全て「仕事」なのである。この気持ちは今も変わってはいない。青臭く、高みを目指して、決して妥協せず、誰に何を言われようと自分のスタンスを貫いてきた。私が常にＪＣに対して、真っ直ぐに向き合ってきた源は全てここにある。

【世界とのつながり】

青年会議所運動のはじまりは、アメリカ・セントルイスの銀行家ヘンリー・ギッセンバイヤー・Ｊｒであった。１９１５年の組織化以降、志を共有して運動に参画した人数は、世界で１００万人以上。国家元首から国連事務総長、経

済、スポーツ、芸術などのあらゆる分野に数多くのリーダーを輩出してきた。現役会員は、現在１２７の国と地域に拡がり、４,７８４ＬＯＭ、１７３,０００人にもおよぶ。日本国内においては、６９８ＬＯＭ、３７,０００人である。世界組織である青年会議所には、それぞれの国や地域で、我々と同じ志をもって活動をしている仲間がいる。世界をパズルに例えるならば、それぞれのピースが地域であり、そこにＬＯＭが存在する。我々は「宇都宮」というパズルのピースを担い、「明るい豊かな社会の実現」へと導く責任がある。一つひとつのピースの集合体が、国家や世界なのである。全てのピースが彩られることで国際青年会議所（ＪＣＩ）の目標である「恒久的世界平和」が実現できるのだ。

我々は、地域そのものであり、国家、そして世界ともつながっている。青年会議所だからこそ持てるあらゆる機会を享受し、切磋琢磨をして相互発展することで、地域における青年会議所運動の最大化が図られるのだ。

【青年会議所は学び舎である】

「ＪＣに入っていなかったら今の自分はいない」

卒業した先輩方は、声を揃えて言う。ＪＣを個人の機会から捉えるならば、修練と切磋琢磨を積み重ねて自己の成長につなげる場である。青年会議所は、単年度制の文化ゆえ毎年役職が変わる。苦手なことや年齢差を克服しながらも、与えられた役職を毎年演じきることが大切であり、全てを受け止めて、常に真摯に向き合うことが自分を大きく成長させてくれるのである。

また、ＪＣにはメンバーのスキルアップやＬＯＭにとって有益なプログラムが数多く準備されている。ＪＣＩや日本ＪＣは、会員にそれらのプログラムを提供できる仕組みを確立している。加盟する会員会議所として、この仕組みを上手く活用してＬＯＭのレベルアップを図りたい。また、メンバーはＪＣＩや日本ＪＣに出向することもできる。出向することは、世界レベル・国家レベルでの青年会議所運動に触れることができる貴重な機会であり、視野を広げ大局観を身につけることができる。物事を大局的に捉えるメンバーが増えることにより、我々の行う地域でのまちづくりがより良いものになるはずである。

【市民が主役のまちへ】

中央集権型から地方分権型へ移行しつつある社会の流れ、学生のボランティア活動の単位化や公益法人制度改革を鑑みても、時代は、市民の意思と責任で、

まちづくりや地域の課題の解決に取り組むことが求められる市民協働型社会へ移行している。宇都宮市でも「宇都宮市自治基本条例」が２００９年４月に施行され、市民、議会、行政が共通の将来像や目標を共有し、市民が幸せに暮らせるまちづくりの取り組みを始めている。我々も過去５年間に渡り、地域のサイレント・マジョリティの声を市政に反映させる「うつのみや市民討議会」を宇都宮市と共催し、その一助となってきた。民・官の様々な取り組みは確かに行われているが、それを享受する側、すなわち市民にその取り組みが認知されているかと言うと決してそうではない。市民協働型社会をつくるには、多くの市民にそれらの取り組みが届く仕組みを構築することも必要である。しかし、これは取り組みを発信する側だけの問題ではなく、それを受信する市民の意識の問題も重要である。我々は、高度経済成長期に与えられるものを何の疑問も持たず受け入れ、豊かに育ってきた社会構造の中で、知らずしらず社会に対して無頓着・無関心になっているように感じる。これは地域に暮らす市民として、当事者意識が欠如しているということに他ならない。

「ＪＣしかない時代から、ＪＣもある時代へ」

このフレーズは、まちづくりに参画する団体がＮＰＯをはじめ現代社会には数多く存在していることを指し、近年、ＪＣの存在意義を再確認するときにしばしば使用されてきた。しかし、時代は今まさにＪＣを必要としている。時代は、我々の目指す「個人の自立性と社会の公共性が生き生きと協和する確かな時代」つまり、市民自らが地域を良くするという当事者意識をもって率先して行動する「市民主導型社会」の構築を求めているのだ。

【市民意識の変革】

青年会議所運動は市民運動である。我々の運動は、全てこの地域に住み暮らす人々のためでなくてはならない。そして運動を拡げるのはこの地域で住み暮らす市民である我々の責務である。「市民の、市民による、市民のための運動」こそが、この地域に活力を与え、最良の変化をもたらす原動力となるはずだ。我々は、常に市民として地域の未来を見据え、市民の意識を刺激し、「明るい豊かな社会の実現」につなげるために、多くの市民を巻き込きこまなければならない。そのためには、自分自身を追想し、この故郷と身近な人にも心を寄せ、宇都宮市民の素晴らしさ、地域らしさを再確認し、地域への帰属意識を醸成すること。それは、市民が誇れるローカル・アイデンティティを発信し、市民の

琴線に触れることで、地域に対する意識を変えることである。

人は、当たり前のことには無関心になる。しかし、当たり前のようなこの日常は、この地域社会を創り、つなげてきた先人たちからの恩恵であることを忘れてはならない。時代には常に未来を見据え、つなげていく人間が必要であり、その意識をもった市民が多いほど、より良い地域社会が実現できるはずだ。

我々の使命は、市民の無関心を関心に変え、関心を意識に変え、そして意識を行動に変えることである。

【共助の精神】

２０１１年３月１１日に発災した東日本大震災から３年が経とうとしている。震災後、２５,０００人にもおよぶ全国のＪＣメンバーが、東北支援に駆けつけた。我々も地元の復旧作業の傍ら、東北に幾度となく足を運んだ。有事の際に真っ先に動くことは、先人から受け継いできたＪＣの魂であった。岩手、宮城では着実に復興が進んではいるが、原子力発電所事故のあった福島は、警戒区域以外の地域においても未だ風評被害などに苦しんでいる。東北が被災したのはただの偶然であり、この未曾有の出来事を決して他人事にしてはならない。

グローバル化が進み、世界との距離が近づいた現代社会においても、飢えや貧困、伝染病などで命を落とす人々が未だに存在している。１日１２０円未満で生活する人は、６０億人の世界人口のうち１２億人存在する。２４の国と地域では紛争の最中にあり、そこで住み暮らす２３億人の多くは常に命の危険と隣り合わせの生活をしている。アフリカでは６０秒に１人、主に５歳以下の子どもたちがマラリアなどの伝染病で命を落としている。彼らがそこで生まれたこともまた偶然である。

この地域で生まれ、暮らしている我々は幸運である。しかし、それは偶然なのかもしれない。生かされていることへの感謝を常に忘れることなく、地域での活動とともに、偶然被災してしまった人々や世界の恵まれない地域に住み暮らす人々にも心を寄せ、未来への可能性を紡いでいくことへの一助となれるよう努めたい。共助の精神をもって率先して行動に移していくことが、地域を牽引するＪＡＹＣＥＥとして、そして心のふれあいを大切にする宇都宮市民としての姿なのであるから。

【真の「公」を目指すために】

青年会議所は、若手経済人の団体と表現されることがある。会員の多くが経営者であり、それに準ずる立場にいることは否定できない。しかし、会の本質を考えると、決して経済人だけの団体であるべきではない。一定の入会資格はあれど、市民であれば入会できる公に開かれた純粋な市民団体であるべきだ。近年の日本全体の会員の減少を鑑みるに、現代の青年会議所の在り方が時代に即していないと真摯に受け止めるべきであろう。現在、宇都宮市の人口は約５１万人であり、２０歳から４０歳までのいわゆるＪＣ世代は約１３万人存在している。職業などに先入観をもつことなく、多種多様な同世代の青年にＪＣの意義と魅力を伝え、１人でも多くの仲間を迎えるとともに、青年の英知を結集して、市民運動に転換をしていく。それが、現代の青年会議所を時代に即した市民団体に進化させる道筋であると考える。

真の「公」を目指すために、より良い地域社会を構築するために、運動の原点に立ち返り、組織維持の為という観点ではなく、地域をより良くする市民運動という観点で、日本の青年会議所に先駆け、革新的な手法を確立し、会員の拡大に努めたい。

【市民の信頼と社会の負託に応え得る組織】

永らく青年会議所では、黒子に徹する文化があった。地域のために事業をしても決して前に出ることはない。これは利他の精神にも通じる日本人の素晴らしい美徳である。しかしながら、我々の運動の最大化を図るには、より多くの市民を巻き込むことが肝要である。我々の行う事業が常に市民に期待される。そのような組織が理想であり、我々の運動とともに組織の存在自体を周知していくことが必要だ。我々は、この地域と市民のために存在する。運動の波及を見据えたブランディングは、間違いなく「明るい豊かな社会」への近道となるはずである。

本年度、宇都宮青年会議所は公益法人へと移行し４年目を迎える。法人格移行後の事業の在り方やその運営方法などを検証し、社会の負託に応え得る組織になるよう一層努めたい。そして、青年会議所運動が社会的に説得力を持つためにも、ガバナンスやコンプライアンスを強化し、積極的なディスクロージャーにも務め、市民から信頼される「公益性と透明性の優れた組織」の確立を実現したい。

【未来への希望】

２０１３年９月７日、ブエノスアイレスで開かれた国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）総会において、２０２０年オリンピック・パラリンピックが東京で開催されることが決定した。明確な期日が設定されたことにより、アベノミクス効果で明るい兆しが見えはじめた日本経済を更に後押しすることになるであろう。また、未来への希望と期待感は、まだ漠然としているものの国民の高揚感という形で、連日の報道などを通じて肌で感じることができる。１９６４年の東京オリンピックは、日本の先進国入りを早めた大きな要因のひとつであったと言われている。歴史を紐解けば、まちや国の発展にはターニングポイントが必ずあり、２０２０年の東京オリンピックも新しい時代へのターニングポイントのひとつとなっていくであろう。

２０１２年に総会で決議した日本青年会議所全国大会の招致を成功することができれば、間違いなくこのまちの大きなターニングポイントになる。全国大会は、１５,０００人にもおよぶＪＣメンバーを国内外から迎え、日本の青年会議所運動の集大成が、我々が掲げるビジョンとともに宇都宮から全国に向けて発信される。主管する大義は、地域の発展に寄与するインフラの促進や経済効果、地域ブランドの発信などに留まらず、この故郷宇都宮が更なる飛躍を遂げる契機を、我々自身で創り出すことができるということだ。

全国大会の招致は、地域における青年会議所運動のひとつの究極の形である。このまちの未来への希望を胸に、力強くその第一歩を踏み出していこう。

【結びに】

「青年の進むべき行動目標をつねに語ることなく、世界組織の一員となって、全国の仲間たちと交流を図り、地域開発の為に貢献することを期するものであります」

１９６７年に記された設立趣意書から４７年の時を経て、時代の変化とともに手法が変わることがあっても、我々の目的や志は不変である。

未来への希望を胸に、英知と勇気と情熱を持って責任世代である我々が明るい夢を描ききり、身近な人に共感してもらうことからはじめなければならない。

我々は、一人ひとりが宇都宮そのものであり、
自らが最良の市民となることがＪＡＹＣＥＥとしてのつとめである。